

山田春雄氏寄贈企画展

因州池田侯爵家旧蔵

狩野探幽 百人一首絵展

～幻の百人一首画帖「小倉山庄色紙和歌」限定復刻版～



小野小町（平安時代前期、生没年不詳）女流歌人

会期 平成26年11月8日(土)～平成27年2月1日(日)

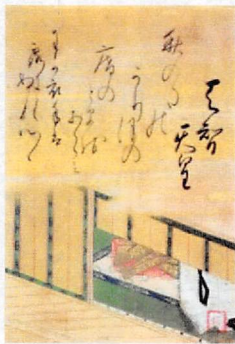
会場 立佞武多の館2階 美術展示ギャラリー

開館時間 午前9時～午後5時(入館時間は午後4時30分まで)

観覧料 大人・大学生300円(団体料金「20名様以上」270円) 高校生以下=無料

今回寄贈された百人一首絵は、当市出身・東京在住の美術史家、山田春雄氏のコレクションである旧因州（鳥取県）の池田公爵家が所蔵していたもので、徳川八代将軍徳川吉宗もご覧になったとされる「幻の小倉山庄色紙和歌・百人一首画帖」の原本を忠実に再現し、さらに歌仙図一枚一枚を丁寧に額装したものです。

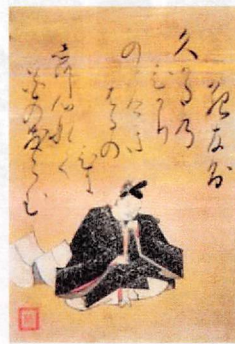
最新技術による原本の美しい意匠がそのままに復元された優美な書と絵、日本美術の精華をお楽しみください。



第1番
天智天皇（てんじてんのう）
秋のたの かりほの庵の とまをあらみ
わが衣手は 露にぬれつつ

意味
秋の田んぼのそばにある小屋は、田んぼの番をするために仮に建てられたものだから、苫（屋根の編み目のこと）が荒くて、すきまだらけ。わたしの衣の袖が、夜露に濡れてしまっているよ。

作者
「大化の改新（たいかのかいしん）で天皇中心の政權をつくらうとしました。その行動はやがて実を結び、即位した天智天皇は日本の国家の礎を築きました。



第33番
紀友則（きのともりのり）
久かたの ひかりのとけき はるのひに
しつこくなく 花の散らむ

意味
陽の光の暖かでのどかな、こんな春の日に、桜の花は、どうして落ちて着きもなく散り急いでいるのだろう。

作者
紀友則は、『六歌仙』を選んだ第35番の歌人である紀貫之（きのつらゆき）の従兄弟です。和歌を詠むのが上手でした。紀貫之・壬生忠岑とともに『古今和歌集』の撰者となりましたが、完成を見ずに没しました。



第2番
持統天皇（じとうてんのう）
春過ぎて 夏きにけらし 白妙の
衣ほすてふ あまのかく山

意味
もう春が過ぎて、夏が来たようね。夏になると白い衣服を乾すと聞いている天の香具山に白い衣服が干してあるわ。

作者
持統天皇は、第1番の歌人である天智天皇の娘です。女帝として即位しました。いまから1300年以上も前のことです。



第35番
紀貫之（きのつらゆき）
人はいさ ころもしらす 故郷は
花そ昔の 香に匂ひける

意味
あなたは、さあね、昔のままの心なのでしょう。わかりませぬね。でも、昔なじみのこの里には、昔のままに梅の花の香りが匂っていますね。

作者
紀貫之は、いまから1100年ほど前のさほど地位の高くない官僚ですが、和歌を詠むのがとても上手で、『万葉集』に並ぶ歌集『古今集』や六歌仙を選びました。



第9番
小野小町（おののこまち）
花の色は うつりにけりな いたづらに
我身よにふる なかめせしめに

意味
春も終わりがしら。桜の花の色が、長雨にあたって、ずいぶんと色あせてしまったのね。その桜の花の色と同じように、私の美しさもおとろえてしまったわ。恋愛の悩みなんかに思い悩んで、ほんやりと暮らしているうちに…。

作者
小野小町は、いまから1150年ほど前の宮廷女官と考えられています。絶世の美女だったといわれています。『六歌仙』のひとりにも選ばれています。



第57番
紫式部（むらさきしきぶ）
めぐり逢て みしやそれとも 分ぬまに
雲かくれにし よはの月かな

意味
久しぶりに会えたのに、見たかどうかもわからないくらいに雲に隠れてしまふ夜更けの月のように、あなたも、あつという間に帰ってしまいましたね。

作者
紫式部は、本名は伝わっていません。『源氏物語』が広まり、藤原道長（ふじわらのみちなが）の娘で一条天皇中宮の影（しょうし）のもとへ宮仕えをするようになりなりました。第58番の歌人である大貳三位（たいいにのさんみ）は娘です。



第17番
在原業平（ありわらのなりひら）
ちはやふる 神代もきかす 立田川
から紅に 水くるとは

意味
不思議なことが多い、神様がこの世界を治めておられた時代にも聞いたことがありませんよ。紅葉の名所の竜田川が、紅葉を散らして鮮やかな紅色に水をくるとは。

作者
在原業平は、いまから1350年ほど前の貴族です。美男で恋愛上手だったそうで、『伊勢物語』の主人公だと考えられています。『六歌仙』にも選ばれています。



第62番
清少納言（せいしょうなごん）
夜をこめて 鳥の空ねは はかるとも
よにあふさかの 關はゆるさし

意味
夜が明けないうちに、夜明けを告げる鶏の鳴き声をまねて、わたしをだまそうとしても、鶏の鳴き声をまねて門が開いた函谷関（かんこくかん）ならともかく、あなたとわたしの間にある逢坂関は開きませんよ。

作者
清少納言は、第36番の歌人である清原深養父は曾祖父、第42番の歌人である清原元輔は父にあたります。一条天皇皇后である藤原定子に仕えました。『枕草子』の作者です。



第24番
菅家（かんげ）
このたひは ぬさもとりあへず 手向山
紅葉のにしき 神のまにまに

意味
今回の旅では、神さまに捧げる幣（ぬさ）をご用意することができませんでした。この手向山（現在の京都府と奈良県の県境の山）の錦織のように美しい紅葉をどうぞ神さまの御心のままにお受けください。

作者
菅家は、菅原道真（すがらのみちざね）のことです。学問全般に優れていたため、いまでも学問の神様として尊敬されています。



第97番
権中納言（ごんちゅうなごんていか）
来ぬ人を まつほのうらの 夕なきに
やくやもしほの 身もこかれつつ

意味
いつまでも来ないあなたを待つわたしは、あの松帆の浦（現在の淡路島の北端の岩屋海岸）で、夕方に海が阻んでいる頃に塩を作るために焼く藁塩のように、身を焼かれるように恋焦がれていることです。

作者
権中納言定家は、本名を藤原定家といいます。この「小倉百人一首」を選んだ歌人です。第83番の歌人である藤原俊成は父親です。歌学者として重んじられました。